

おい図書館

No.224

発行
代表
青木 和子
松戸市牧の原 10-4-16
TEL 047-311-0886

「おい図書館」

定例会に参加



マツコ 富田文子
1月20日(金)、総合市民センターでの「おい図書館」定例会に参加しました。

常世田先生からの提案で「今回は各自のスマホからZoomで参加してみませんか？」との事で、Zoomへの皆の接続チャレンジからスタートしました。初めはやはり少し手間取りましたが、皆さんがちゃんと繋がってホッとしました。オンラインで繋がれると便利なので、今回のように皆でやってみながら参加できたら良いなと思います。

定例会では先ず、松戸駅周辺の住民として参加した私から、「松戸中央公園・相模台公園の再整備に伴うワークショップ」の内容を情報共有させて頂きました。

この情報に対しての常世田先生のコメントは、中松戸駅東口の「新拠点ゾーン」にこれから新しく建つ図書館は「地域館」ではなく「本館」。本来は市内全域や、ましては他市からも人が来る想定で作る必要がある。車でのアクセスやたくさんの台数が停められる駐車場を含めて計画するべきで、そういう事が考えられているのか疑問に感じる。との事でした。

図書館については、旧官舎跡

地に位置が示されていていました。個人的には市庁舎建て替えが検討されている南ゾーン(旧法務局跡地)ならば、多少はそれが叶うのでは? と思ったりしました。

今回は公園の再整備についてでしたが、まもなく他のゾーンについてもう少しずつ計画が出てくるようです。市民としても、しっかりと市の動向を見守りたいと思います。常世田先生は、他市の事例として、長野県塩尻市の図書館の紹介をして下さいました。

長野県塩尻市立図書館

(えんぱーく)

塩尻市の人口は6万人ですが、年間60万人の来館(30%は市外から)がある。それに対応できる駐車場として200台。(もちろん、地域の問題もあるけれど、県や自治体に図書館への想いが溢れていて羨ましい!)

次に、オソラインで参加されていた武笠さんより、「第二次松戸市社会教育計画案」について、パブリックコメントの情報共有がありました。(期間は1月16日〜2月15日まで)

図書館整備についてもこの中にあるので、しっかりと読んで一人ずつ提出しましょう、との事でした。これまでも「おい図書館」では、団体としてではなく個々で提出しているそうです。

第二次松戸市社会教育計画案

※この政策案は、市のホームページ、行政資料センター、各支所、図書館(分館を含む)、また市民活動サポートセンター、担当課(社会教育課)で閲覧できます。

これをご覧になった常世田先生からは、「いつの時代の計画ですか?」と、バツサリ!!

「どの辺りが時代遅れなのですか?」との参加者からの質問に、「まず、なぜ計画の重点項目の第一に「松戸の歴史・文化」なのか?そもそも第一に来るのは「市民の主体性を育む学びの機会の充実」ではないのか?そこに住む市民にとって、自己実現の場や、自身の生活や仕事を豊かにすることが重要で、特に働き盛りの人を逃さない施策が出来なければ、住民が他市に流れていくのは当然ではないか?松戸市は、それを止めたくはないのか?」と。本当にごもっともです。そして、「社会教育」という表現も、最近では「生涯学習」という表現の流れになつていく。他自治体でも「生涯学習」という位置づけでいろいろな計画がなされているはず、とのこと。これはもしかしたら、先進的な図書館のある自治体の計画を見て

みると面白そうだと思います。(そもそも社会教育はどちらかというと、流的には「成人教育」を指すらしい。)

常世田先生からのアドバイスのおかげで、資料を見る視点がクリアになりました。正直なところ、パブリックコメントは資料が膨大過ぎて、市民はそれを読むだけでも一苦勞です。今回のように、専門家の方にポイントを教えて頂けるだけで、考えるきっかけになります。

私自身も、「生涯学習」「生涯スポーツ」という視点でこれから的人生100年時代の生き方を考えていたところなので、もう一度この計画を読んで、パブリックコメントを提出したいと思いました。

今回は提出期限が迫っていたので、皆さんへの情報松散は残念ながら時間的に間に合いませんでしたが、今後は皆さんも機会を捉え

て、気軽にパブリックコメントをお寄せ頂きたいと思いました。

ウォームバンク



報告 青木和子

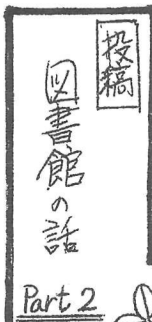
東京新聞ネット版に以下の報道があったと常世田さんから情報を頂きました。まさに2020年の映画「パブリック図書館の奇跡」が現実になっていくのです。(会報210号に紹介)

イギリスでは、ロシアのウクライナ侵攻の影響を受けて、エネルギー価格の高騰による暖房費の急騰に苦しみ、更に記録的なインフレが生活を圧迫する中、人々は支え合って厳しい冬を乗り切る取り組みが広がっている。

食品を無償提供する「フードバンク」のように暖かい場所を無償提供するサービスが、地域の図書館

やコミュニティセンター、教会などで実施され、全英300ヶ所以上に拡大。人々は暖をとりながら温かい食事を食べ、Wi-Fiがあり、携帯電話の充電もできる。気軽に訪れて時間を過ごせ、節約の情報交換をするなど、貴重な交流の場となっている。

「貧しい人が行く場所」というレッテルを貼られないよう、全ての住民に開放されていく事を強調し、名称も「ウォームスペース」「ウォームウェルカム」などの表現で明るい印象を心掛けている。



神保子

※22号に続いて本に関する情報を。

④「ナチスから図書館を守った

人びとに囚われの司書、詩人、学者の闘いと」：D・E・フィッシュマン著 2019年2月原書房刊

リトアニアのヴィリニウス（ヴイルナ）のユダヤ人社会の話。ユダヤ文化を守るため、ゲットに収容され作業を強制されたユダヤ人たちの中で秘密の組織が作られ、時には危険を犯しても本や文化財を隠し貯蔵した。リーダーの名前や様々な人間ドラマも交えて語られたノンフィクション。終盤で期待したソヴィエト軍の助力は得られず、むしろ介入とも思われる事態に直面する。

どこかの書評で知って、松戸の図書館で借りることができた。

手元に無いので記憶があいまいだが、いつまでも心に引かかっている本なのだ。

⑤「戦地の図書館と海を越えた」：億4千万冊と」：モリー・グプティル・マニング著 東京創元社

初版2016年、文庫化2020年

ナチスドイツの文化政策は、1933年のベルリンにおける大々的な焚書セレモニーに象徴される。

ドイツ文学の純粋性を守るため、「反ドイツ主義」とみなされた進歩的な作家、平和主義者や社会主義、改革主義、性的自由などを支持する作家を標的として、書籍が廃棄され燃やされ、発禁処分となり、人への攻撃となり、ラジオや映画を通じて全国に拡大した。

開戦後の占領地でも実施され、東ヨーロッパの公文書館375、博物館402、図書館957、その他の施設53が標的にされた。前記④は、ドイツのこの政策に対して自らの文化を守ろうとしたリトアニアにおけるユダヤ人の物語である。

ドイツの焚書政策に対して世界各地で批判が渦巻いたが、アメリカではドイツと真逆の文化運動が展開した。その経緯と影響を調べ

たものがこの本である。

1940年頃、アメリカでは、ドイツの目に見えない攻撃から

アメリカの思想を守る方法について図書館員が話し合った結果、口思想戦における最強の武器と防具は本である。口という結論に至り、寄贈された本を戦地に送る「戦勝図書運動」が始められた。その後、アメリカ図書館協会が始めた「国家防衛図書運動(NDBC)」が100万冊を目標にして引き継いだ。1942年からは、出版業会が組織した「戦争図書審議会」が日本こそは思想戦の武器である。口という合意のもとに「兵隊文庫」を出版。国を挙げた事業となった。「兵隊文庫」はポケットサイズのペーパーブックとして戦場の兵士たちに届けられ、合計一億4千万冊に及

んだ。

出版された本のジャンルは、あらゆる方面にわたる。

物資不足、紙不足、資金難などの困難を、知恵を絞って切り抜けていった。兵士たちは本の到着を心待ちにし、仲間と回し読みし、更にはリクエストの手紙を書いた。前線へ移動する船の中で退屈を凌ぎ、頭上を砲弾が飛び越す塹壕の中でも本を読んだ。太平洋上の激戦地にも、あらゆる戦場の最前線にまでも届けられた。(何という対比！日本軍兵士には食料さえ届かなかった。)

大統領選に対する愚惑から、検閲によって一部の本を削除する動きもあったが、アメリカ民主主義の原点が思い起こされて取り止めになった。

この本の序章には「これは、剣と同じように強い力を持った本の記録である。」とある。